

徳川家康の遺骸を駿河から日光へ運んだ「御尊櫃御成道」にほど近いN邸は、2009年4月に完成した。建て替え前の家は戦後間もなく建てられ、隙間風が入り、冬には家の中で氷が張るほどだった。現在はゆったりとした敷地の2階建て住宅に、3世代5人、そして愛犬のスピッツが暮らしている。

玄関を入ると一段高い前室の和室、その先に光をいっぱい浴びたリビングが広がっている。大勢の来客で賑わう特別な日には、和室の障子を開放し、リビングと一体の空間を作る。蒲の穂で仕上げた天井、OMソーラーのダクトにあしらった和紙。自然素材の和の意匠も、優しい空間を演出する。

多忙なご主人の趣味は自転車や車。休日に愛車をガレージでいじっては、玄関を通らずにリビング裏の廊下を経由し、水回りまでアクセ

スできる。庭仕事が大好きなお母様は、勝手口から遊びにきたご近所の友達と、縁側でのんびりとおしゃべりを楽しむ。肌寒い日には縁側から自室に招き入れる、昔ながらの使い方もお気に入りだ。

南向きのリビングは、両側にダイニングとお母様の部屋が雁行型に配置され、どの部屋にも光が一日中降りそそぐ、家の中の中心スペース。

「昔の家のように扉で仕切らない、のびのびとした家、それでいて家族がそれぞれの生活や趣味を楽しめること。」これがご主人のリクエストだった。1階は扉がほとんどないオープンな空間だが、生活リズムが異なる住まい手が快適に暮らすことができ、愛犬も自由に走り回れる。2つのリクエストをどちらも叶えた住まいが完成していた。

日本の伝統家屋特有の繋がりのある間取りが活かされ、そこに住まう全ての人の暮らし方に寄り添っている。のびやかな空間でありながら、気持ちのいい空気が保たれているのは天井や床に使用した無垢の木材、そして空気をデザインするOMソーラーのおかげでもある。「冬寒く、夏暑い以前の家に比べ

日本家屋の伝統的な知恵が 現在に息づいた快適な住まい

広々とした開放的な空間で、一人一人のライフスタイルは保ちつつ自然に寄り添い、冬暖かく、夏涼しく過ごすために。そんな課題に向き合った家づくりのレポートです。



1. 光が降りそそぐリビングは引き込み式の障子とカーテンで日射をコントロールできる。檜を組んだ天井の意匠も特徴的
2. 閉め切ったり開放したり、建具使いで2通りに使える前室の和室
3. ダイニングから和室を見る。和室の小上がりは座るとちょうどいい高さ
4. 廊下からガレージに直結する出入口
5. 愛犬のスピッツくん
6. 玄関とガレージへ続く廊下には裏庭の景色を切り取る窓を設置
7. 庭の東側から家屋を見る。雁行型に沿った幅広い溝縁では、気持ちのいい時間を過ごせそう
8. 車が2台ゆったり停められるガレージ壁面には自転車や工具を収納

たら夢のようです。もちろん、エアコンを使うことはありませんが。1年中気持ち良くて、まるで、家中が縁側です。」

完成した頃は真っ白だった柱の檜や天井の杉も経年とともに味わいを増してきた。そこに住まう全ての人のゆったりとした暮らしが叶う家。自然の恵みも、最新技術も取り入れる。光が巡り、風が抜ける。先人がずっと紡いできた繋がりのある暮らし方を、今の時代に当てはめた快適な住まい。穏やかな日常がそこに広がっていた。

